

【2021年度 明治大学阿部英雄研究奨励金実施報告書】

※ 所属・学年は2021年度のものです。

ふりがな 氏名	てらだ よう 寺田 陽	所 属	文学部史学地理学科アジア史専攻4年
研究課題	楊鎬の事績と明末の政治・軍事史		
<p>【研究目的】 我が国の戦後における明代史研究はながらく社会・経済史に集中してきたが、近年ではあらためて政治・軍事史の研究に注目が集まってきている。しかしながら、万暦年間以降の政治・軍事史においては、小野和子氏・溝口雄三氏以来の東林党対反東林派という大きな流れに注目が集まり、個々の事象に対して十分な研究の蓄積がなされていないため、その具体像が鮮明には見えづらいといえる。このような状況を打開し、より精緻な政治・軍事史の全体像を形成していくためには、実証的な研究によってその基礎を提示していく必要がある。</p> <p>本研究で取り上げた楊鎬は、明末の政治・軍事史を考えるうえで決して等閑視できない存在であるにも関わらず、彼自身を扱った研究はほとんどなく、壬辰・丁酉倭乱やサルフの戦いを扱った研究の中で部分的に言及されるにとどまる。そのため、本研究では楊鎬の全体像を明らかにすることを通じて、明末の政治・軍事史の一端を示す。</p> <p>なお、2021年4月当時の申請内容は「明末の文官楊鎬を通じてみた明朝中国の軍事制度と人的ネットワーク」であった。その後の研究を通して、政治・軍事史の中で楊鎬と文官・武官の関係を示すことが、その人的ネットワーク・軍事制度をより動的に示すことにつながると考え、研究課題を変更した。</p> <p>【研究方法】</p> <p>①楊鎬の官職・事績年表の作成 研究の基礎として楊鎬の官職・事績年表を作成した。その際、楊鎬の文集が管見の限り見当たらないため、主に『明実録』、『明史』「楊鎬伝」に基づいて作成し、進士の個人情報を書いた「万暦八年進士登科録」（『明代登科録彙編』所収）や壬辰倭乱にかかわった人物の事績を記す朝鮮史料『象村稿』「天朝詔使将臣先後去来姓名」なども参考とした。</p> <p>②楊鎬の政界における人的ネットワークの検討 楊鎬の政界における人的ネットワーク、すなわち文官や武官との結合関係を考察した。この考察にあたっては、『明実録』や『万暦起居注』といった明の官撰史料のほか、『万暦邸鈔』、『経略禦倭奏議』等の明の私撰史料、さらには朝鮮の官・私撰史料など多方面の史料を分析した。</p> <p>③楊鎬の関わった政治・軍事史的イベントの検討 楊鎬の関わった明末の個別・具体的なイベントを、②の検討によって明らかになった李成梁一族との関係を軸として横断的に考察した。このように個別・具体的なイベントを横断的に取り扱う意図は、楊鎬と李成梁一族との関係を動的に把握すること、個々のイベントの分析では見落とされがちなイベントの新たな側面を浮き彫りにすることの二点にある。</p> <p>以上の検討に際して多くの史資料を利用したが、それらの史資料の収集・分析において本研究奨励金が大きいに役立った。</p> <p>【研究結果】 楊鎬の官僚生活（およそ四十年間）は三つの時期に区分することができるため、以下三つの時期に分けて詳述する。</p> <p>第一期 経理起用前の事績と経理起用の背景 楊鎬は万暦八年（一五八〇）の進士であるが、彼の官僚人生のターニングポイントは二十一年の遼東への着任であったといえる。遼東への着任を契機として李成梁一族との関係を深めた楊鎬は異例の速さで昇</p>			

進し、わずか四年後には經理朝鮮軍務に任じられている。この經理起用の背景には内閣、特に次輔の張位への賄賂工作があったのであるが、その裏にはやはり李氏の姿が垣間見えた。さらに、楊鎬が内閣へと送った賄賂の中身が真珠であったことから、淡水真珠の供給源を握っていたヌルハチと楊鎬とが気脈を通じていたことが示唆された。

第二期 「丁応泰の変」

壬辰・丁酉倭乱期に起こった政変「丁応泰の変」について明軍内部の対立、明の政局という側面から考察し、その事件に李氏が深く関わっていたことが明らかとなった。従来「丁応泰の変」の要因として指摘されてきた南北兵の対立をより詳細に検討する中で、北兵の間にも地域的対立があったことが示唆された。また、北兵の中でも特に楊鎬と李如梅が糾弾された背景に、壬辰・丁酉倭乱を通じた李氏による南兵への抑圧があったことが明らかとなった。明の政局については、すでに吏部と内閣の対立が指摘されており、内閣と敵対的であった丁応泰がその政治的に不安定な立場に危機感を募らせたために弾劾に踏み切ったことが明らかにされている。本研究では、吏部だけでなく兵部も内閣と対立していたこと、さらにはその裏に李氏の存在があったことを指摘した。

第三期 遼東巡撫退任と経略の起用

楊鎬は遼東巡撫在任時に、新しい遼東総兵官として李如梅を推薦するが、そのことによって李氏との結合関係を弾劾され、回籍に追い込まれてしまう。その当時の兵部尚書と弾劾の口火を切った麻僖がどちらも陝西出身の東林派であり、兵部に会推された張承胤も陝西籍であることから、この紛糾の背景には李如梅を推す楊鎬と張承胤を推す兵部との対立があるのではないかと推測した。また、つい六年前に李氏との結合関係を弾劾されて巡撫を退いた楊鎬が、李如栢とともに経略に起用された背景には、李氏と内閣主輔方從哲・浙党との陰結があったことを指摘した。

以上のように、楊鎬と李成梁一族の結合関係を政治・軍事史の中で動的に捉えることができた。楊鎬はその半生にわたって李氏と深く結びついていたといえるが、特に注目すべき点は楊鎬の李氏に対する献身さが他に類を見ないものであったことである。一般的に李氏と文官の関係は賄賂の授受などで説明されることが多いが、楊鎬との関係は義理と恩義という任侠的な結合関係であったといえる。

その他、李成梁自身が表舞台に現れない時期においても、李氏が万暦年間の政治・軍事史に無視できない影響力を持っていたことを、具体的な事件の検討を通して改めて明示した。

【研究報告】

本研究は卒業論文「楊鎬の事績と明末の政治・軍事史」として提出した。今後、本研究をもとにさらなる検討を進め、その成果を論文や学会報告という形で発表していく予定である。

なお、当初研究課題の一つとして取り上げていた「明朝の軍事制度」については、ケーススタディにとどまり、十分に考察することができなかつた。申請者は本大学大学院にて明朝の軍事制度、とりわけ経略制度を研究する予定であるため、本研究の成果の一部を修士論文としてまとめることができると考えている。

ふりがな 氏名	たけばやし かな 竹林 香菜	所属	大学院文学研究科史学専攻考古学専修 博士前期課程1年
研究課題	縄文土器の技術的基層の解明と製作集団論への展開		
<p>【研究報告】</p> <p>1.研究の目的 縄文時代では、縄文土器の型式学的な研究が基盤となり、世界の新石器時代文化と比較しても、詳細な土器編年が確立している。 縄文土器の研究では、かつて山内清男が「地方差,年代差を示す年代学的の単位」としての「型式」という概念を提示した上で(山内 1932)、全国的に分布する土器の大別と細別を発表した(山内 1937)。 山内による土器型式編年の枠組みが発表されて以後は、その空白を埋めるようにして、各地域の研究者による地域編年の整備が進められてきた。その結果として、精緻な土器編年が完成されつつある。今後は、その土器編年を用いた文化の実態や全国的な動態、地域相を解明することが、課題となってくるであろう。 本研究では、上記の課題を踏まえて、縄文土器の製作において規範となる技術を「技術的基層」として、その背後に存在する地域単位の集団の存在を解明することを目的とした土器群の分析を行うこととした。</p> <p>2.研究課題 戦前からの縄文土器の研究史を鑑みると、土器の施文具に関しては、縄文原体の研究が主流となっている。ただし、これまでの研究は原体自体の復元に重点が置かれ、土器製作技術の基層に位置付けようという試みは不十分であった。また、文化や社会的な背景の解明を目的とした研究も稀有であったと言える。本研究は、上記のような研究現状を踏まえ、レプリカ法や詳細な文様施文技術の観察、粘土板を用いた製作実験を通して、土器群単位の製作集団を解明することを目的とした。 申請者がこれまでに行ってきた研究では、後期中葉に類似土器群が広域に分布するという学史上の指摘と課題をもとに、東日本における広域土器分布圏の形成過程及び、地域間関係の解明を試みた(竹林 2020)。その中で後期中葉の加曽利 B2 式期に、関東地方から北海道までの広域な地域で、共通する器種構造が広がることを明らかにした。一方で、一土器型式分布圏ごとに捉えられる地域性の問題やその背後にある集団の存在を明らかにすることには、課題を残していた。 また後晩期の土器群にみられる地域性に関しては、かつて山内が後期中葉以降に「精製土器」と「粗製土器」の分化が生じることを指摘し(山内 1939 ほか)、後者を「土着的な土器」(山内 1964)とした。この指摘を受けて、現在でも粗製土器は地域性を捉える重要な指標の1つとなっている。上記の研究の流れの中で、申請者は、関東地方において「精製土器」と「粗製土器」(山内 1939)の分化が生じる以前の母体となった、後期前葉土器群に着目した。 具体的には、関東地方東部の遺跡から一括出土した堀之内 2 式土器群を検討し、西部地域の土器群と比較した場合にみられる文様表出技法の地域的特性を明らかにすることを課題とした。</p> <p>3.分析内容 (1)方法 本研究の分析で対象としたのは、土器群の型式学的な属性であり、その中でも最も着目したのは、個別の器種を越えて共有される文様表出に関わる技術的な特性である。この文様表出技法を解明するには、土器表面に残る施文具の痕跡や使用動作を検討する必要がある。そのために破片資料も含めた、土器の器表面にシリコンを用いたレプリカを作成し、レプリカの顕微鏡観察を行った。また施文具の特徴を良く表すために、拓本もとることとした。 さらに施文具とその使い方から文様施文技術を解明する上では、実資料及び、レプリカ資料の観察をも</p>			

とに、粘土板を用いた再現実験による検証も行った。

分析資料に関しては、遺跡の遺構から一括出土する土器群を対象として、上記のような型式学的観察による定性的な検討を行い、さらに全口縁部点数をカウントすることで、器種組成の定量的な検討も試みた。

(2)分析対象遺跡

千葉県鎌苅遺跡、千葉県遠部台遺跡、千葉県西根遺跡、千葉県吉見台遺跡、神奈川県稲荷山貝塚、神奈川県原出口遺跡、神奈川県山田大塚遺跡

4.資料調査の実施

2021年8月～2022年2月にかけて、土器製作技術・器種組成の検討を実施した。

- ・2021年8月/佐倉市教育委員会・千葉県教育委員会・印西市印旛歴史民俗資料館
- ・2021年11～12月/神奈川県埋蔵文化財センター
- ・2022年1月/横浜市歴史博物館

5.結論と考察

後期前葉にあたる堀之内2式土器群では、これまでに標識資料を基礎とした特定の磨消縄文土器群の分析と評価ばかりが行われてきたという学史がある(今橋 1980、石井 1984 ほか)。その一方で、関東地方東部における後期前葉では、縄文地に特徴的な施文具を用いる一群の存在も指摘されている(阿部 1998a ほか)。

上記のような学史を受けて、申請者は、一遺跡の遺構で一括出土した土器群全体を検討対象とした。その結果として、磨消縄文を施文しない素文系土器では、特徴的な櫛歯状や多截竹管などの工具を用いることが明らかになった。さらに、上記のような素文系土器群の文様を表出する際の原体に関しては、一見すると雑然としているようにみられる文様表出技法にも、原体の選択性及び、原体の利用方法に一定の規範が存在した可能性を指摘し、これらの土器群が前型式である堀之内1式からの伝統を継続しつつも、その一部変容させながら製作されていることも明らかにした。

以上のような文様表出技法レベルでの複数器種の器種間関係を明らかにすることは、一時期の土器製作技術の基層を解明するだけでなく、土器群単位に捉えられる集団が存在した可能性を指摘でき、これらの土器群を製作した集団がのこした遺跡群を解明することにもつながると、申請者は考えている。

6.今後の展望

上記で指摘した事実からみえてくるのは、堀之内2式土器の型式構造に内在する地域的特性である。関東地方東部の土器群においては、土器製作技術の一部である文様表出に、充填縄文と地文縄文の2つの手法があり、櫛歯状や多截竹管などの特徴的工具の使用が認められる。これらの土器製作技術の基層性が、後続する後期中葉の加曽利B式土器群に継続する可能性が高い。

近年、後期中葉の器種に関しては、製作上の作り分けに加えて、道具としての使い分けに関する研究が推進されている(阿部 1998b、米田・阿部 2021、阿部・栗島・米田 2021)。

米田・阿部らによると、精製土器と粗製土器の両者は、煮沸する内容物の差異を反映しているとの見解が示されている。本研究で明らかにした関東地方の地域的特性を詳細に見た場合に、後期中葉の土器群へどのように変遷するのかを解明することを、将来的な課題としたい。

引用参考文献

阿部芳郎 1998a「堀之内2式土器の構成と地域性—下総台地における堀之内2式土器成立期の様相—」『縄文時代』第9号, pp.57-79, 縄文時代文化研究会

阿部芳郎 1998b「縄文土器の器種構造と地域性」『駿台史学』第102号, pp.51-81, 駿台史学会

阿部芳郎・栗島義明・米田穰 2021「縄文土器の作り分けと使い分け—土器付着炭化物の安定同位体分析からみた後晩期土器の器種組成の意味—」『日本考古学』第53号, pp.41-61, 日本考古学協会

石井寛 1984「堀之内2式土器の研究(予察)」『調査研究集録』第5冊, pp.1-47, 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団

今橋浩一 1980「堀之内土器について」『大田区史(資料編)考古Ⅱ』, pp.137-162, 東京都大田区

竹林香菜 2020「東日本における縄文時代後期中葉土器群の構造と動態—広域土器分布圏の形成メカニズムと地域間関係—」『駿台史学』第169号, pp.101-135, 駿台史学会

山内清男 1932 「日本遠古之文化」『先史考古』1 (1) ,pp.3-6,先史考古学会

山内清男 1937 「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古』1 (1) ,pp.29-32,先史考古学会

山内清男 1939 「堀之内式」「加曾利 B 式」『日本先史土器図譜—解説』先史考古学会

山内清男 1964 「総論」『日本原始美術』講談社

米田穰・阿部芳郎 2021 「土器付着炭化物の同位体分析で探る土器の使い分け」『季刊考古学』第 155 号,pp.75-79, 雄山閣

【研究成果の公開】

1. 口頭発表

「縄文時代の土器製作にみる社会—東関東における後期土器群の検討を中心に—」2021 年度駿台史学会大会, 駿台史学会, 2021 年 12 月 11 日(土)

2. 論文の投稿

(1) 竹林香菜 2022 「関東地方東部における堀之内 2 式土器の成立に関する研究—文様表出技法にみる土器製作技術の基層と地域性—」『駿台史学』第 174 号, pp. 221-245, 駿台史学会

(2) 竹林香菜 2022 「堀之内 2 式土器の地域性に関する研究—器種組成の検討を中心に—」『考古学集刊』第 18 号, pp. 21-41, 明治大学文学部考古学研究室

ふりがな 氏名	とどろき なおゆき 轟 直行	所属	文学研究科史学専攻考古学専修 博士後期課程1年
研究課題	炭素・窒素同位体比分析を用いて弥生時代の生業を探る —ひたちなか市教育委員会所蔵資料を対象に—		
<p>I. 課題の設定</p> <p>弥生時代は水稲耕作を中心とした社会だったと考えられている。しかしながら、関東地域ではこの図式が定説化しているわけではない。なぜなら、当地域では水稲稲作の存在を証明する遺構の検出例がきわめて少なく、かつ水稲耕作に不利とされる谷地形に沿った台地上に遺跡が濃密に分布する傾向があることから、畠作中心の生業だったと主張されることもあるからである。畠作中心の生業では、新たな耕地を求めて移動を繰り返すことに適合した社会組織が構築されるため、水稲耕作による生業を主とした集団のそれとは差異が生じる。したがって、どちらの生業を関東地域の人々が選択したかによって、当時の社会組織に対する理解も異なるものとなる。</p> <p>申請者はこの問題を解決するため、畠作を中心とした生業が行なわれていたととくに強く主張されている東関東地域を対象に、レプリカ・セム法で土器の種子圧痕調査を実施した。その結果、畠作物であるアワ・キビは非常に少なく、イネが圧倒的に多いことを明らかにし、畠作中心の生業という説に疑問を提示した。しかしながら、この方法では検出されたイネが水稲耕作と畠作（すなわち陸稲）のどちらで栽培されて獲得されたものかを明らかにできなかった点が課題として残された。</p> <p>II. 分析の方法</p> <p>以上の課題を踏まえ、本研究では、弥生時代の東関東地域で作られたイネが水稲と陸稲どちらであるのかを明らかにするための試みとして、炭素・窒素同位体比分析を実施することとした。この分析方法を採用した理由は、横浜市に所在する複数の弥生時代遺跡や、大井町中屋敷遺跡出土イネ・雑穀類を対象に行われた炭素・窒素同位体比分析によって、水稲耕作によるイネはアワ・キビといった畠作物とくらべて高い窒素同位体比を持つことが明らかにされており（米田 2017）、上記の課題を解決する上で適切と考えられたためである。</p> <p>分析対象としたのは、ひたちなか市東中根遺跡で調査された弥生時代後期の竪穴建物から出土した炭化米である。なお、弥生時代遺跡に属する雑穀類は出土例が少なく、雑穀類を対象に炭素・窒素同位体比分析を実施することは困難だったため、今回は比較対象として平安時代遺跡から出土した炭化米と雑穀類を分析することとした。対象としたのは、ひたちなか市船窪遺跡出土炭化米とアワである。</p> <p>船窪遺跡出土炭化米とアワについては、既に年代測定が実施され、平安時代に属するという結果が得られているが（國木田・佐々木・山下・稲田・設楽 2021）、東中根遺跡出土炭化米に対してこれまで年代測定が実施されたことはなかった。そのため、コンタミネーションの可能性は排除できていなかったことから、今回放射性炭素年代測定も併せて東中根遺跡周度炭化米に対して実施することとした。</p> <p>なお、炭素・窒素同位体比分析および放射性炭素年代測定は、東京大学総合研究博物館の米田穰氏に委託した。</p> <p>III. 分析結果</p> <p>今回の分析によって得られた結果は、以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 東中根遺跡出土イネは、弥生時代後期とされる年代幅に収まるものが得られたため 			

表 1. 放射性炭素年代測定の結果

資料名	測定 ID	¹⁴ C 年代	補正用 $\delta^{13}C$
東中根遺跡イネ-1	TKA-25241	1890 ± 20 BP	-26.5 ± 0.3 ‰

¹⁴C 年代の誤差は 1 標準偏差を示す。

表 2. 推定される較正年代 (cal BP 表記)

資料名	較正年代 (1SD)	較正年代 (2SD)	較正データ
東中根遺跡イネ-1	1826 cal BP (48.0%) 1780 cal BP 1767 cal BP (20.3%) 1748 cal BP	1867 cal BP (4.5%) 1854 cal BP 1835 cal BP (91.0%) 1735 cal BP	IntCal20

表 3. 推定される較正年代 (BC/AD 表記)

資料名	較正年代 (1SD)	較正年代 (2SD)	較正データ
東中根遺跡イネ-1	125AD (48.0%) 170AD 183AD (20.3%) 203AD	83AD (4.5%) 96AD 115AD (91.0%) 215AD	IntCal20

表 4. 元素および安定同位体比の分析結果

資料名	測定 ID	$\delta^{13}C$	$\delta^{15}N$	炭素濃度	窒素濃度	C/N 比
東中根遺跡イネ-1	YL46711	-26.0‰	3.5‰	43.6%	2.3%	21.9
東中根遺跡イネ-2	YL46712	-25.1‰	3.7‰	47.6%	2.3%	23.7
船窪遺跡イネ-1	YL46715	-24.4‰	6.6‰	53.1%	3.5%	17.5
船窪遺跡イネ-2	YL46716	-25.0‰	7.9‰	56.3%	3.2%	20.6
船窪遺跡イネ-3	YL46717	-23.8‰	3.1‰	50.9%	2.3%	25.6
船窪遺跡アワ・ヒエ-1	YL46718	-10.0‰	6.8‰	55.6%	4.5%	14.5
船窪遺跡アワ・ヒエ-2	YL46719	-9.6‰	5.1‰	58.5%	3.7%	18.5
船窪遺跡アワ・ヒエ-3	YL46720	-9.6‰	5.0‰	59.8%	4.2%	16.5

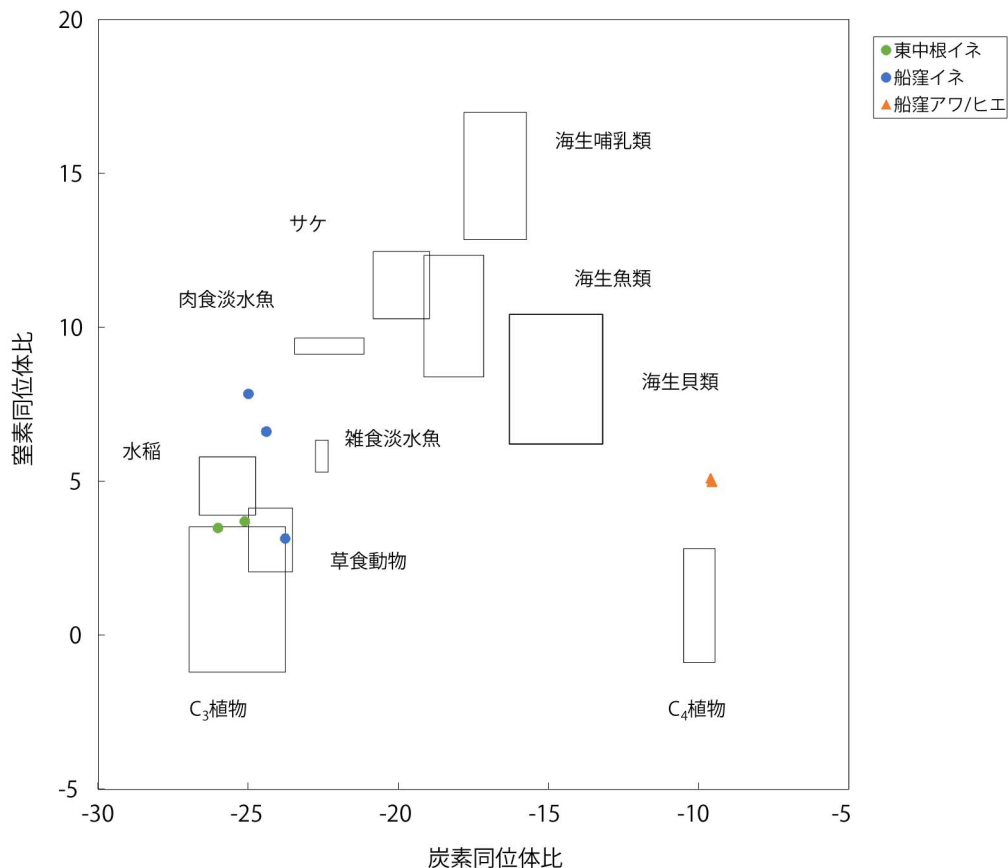


図 1 今回の分析結果 (米田穰氏作成)

(表1~3)、コンタミネーションである可能性は排除された。これによって、東中根

遺跡出土イネが今回の研究目的に対して適切な資料であることが明らかとなった。

2. 東中根遺跡出土イネ（弥生時代後期）の窒素同位体比は3.5%と3.7%で（表4）、これらは水稲と判断される範囲よりも低いものであった（図1）。
3. 船窪遺跡出土イネ（平安時代）の窒素同位体比は6.6%、7.9%、3.1%であった（表4）。前二者の値は水稲と判断されるものであるが、後者の値は水稲と判断される範囲よりも低かった。
4. 船窪遺跡出土アワ（平安時代）の窒素同位体比については6.8%、5.1%、5.0%という値が得られた（表4）。6.8%という値はかなり高いが、5.1%、5.0%という値は中屋敷遺跡出土アワと近いものであった。

IV. 分析結果から見えてきた次なる課題

以上の分析結果から見えてきた課題は次のとおりである。

東中根遺跡出土イネの窒素同位体比の値は、水稲と判断された船窪遺跡出土イネや同遺跡出土アワのそれよりも低く、かつ水稲と判断される範囲よりも低いものであった。このことは、東中根遺跡出土イネが陸稲である可能性を示唆している。もし、これらのイネが陸稲であるとするなら、東中根遺跡とその周辺で営まれた生業は畠作を中心としたものなのか、あるいは水稲耕作と畠作の混交による生業なのかが問題となってこよう。

ただし、今回分析に供した東中根遺跡のイネは2点しかなく、窒素同位体比の傾向を把握するまでには至っていない。そのため、今後分析資料を増やすことでその傾向をつかみ、この問題についてより踏み込んだ解釈ができる基盤を整えていきたい。

引用文献

- 國木田 大・佐々木由香・山下優介・稲田健一・設楽博己2021「関東地方における弥生時代の穀類利用の年代研究（2）」『第38回日本文化財科学会大会研究発表要旨集』日本文化財科学会
- 米田 穰2017「水稲？陸稲？」高橋健編『横浜に稲作がやってきた！？』横浜市歴史博物館